沖縄返還協定調印阻止！
三里塚強制収用阻止！
自衛隊=帝国主義軍隊解体！

5・24 全関西叛軍決起集会

＝基調報告＝

共産主又の革命的再興の事業はいまだ点ぜられた一つの火花にしかすぎない。腐りきった石女の思想は、若々しい情熱に燃え、未来を求めたプロレタリアートの青々とした若草の成長を枯れさせてしまった。最早、青々とした若草は生まれてこないのか？
火花は枯れきった枯草に点ぜられる。火は枯草を焼き尽し、枯草は火を追い求め、若草を枯らした病根をやき尽す。
そのあとに、そのあとにこそ青々とした若葉が新しい時代の到来を告げる。　　共産主又1号　1959.

関西地区叛軍連絡会議

5.15 舞鶴軍港解体斗争報告（軍事局）

舞鶴軍港解体斗争は京大C戦線、立命C戦線、同志社大全学斗を中心に過去二回斗われてきており、我々関西地区叛軍は、今回初参加し、全京都学生連合会の諸君とともに戦斗的に斗い抜いた事を報告したい。

舞鶴港は文字通りの軍港として20世紀の初頭から日帝のとりわけ朝鮮、中国への侵略のための港として現在に至るまで日本海沿岸最大の拠点港として［illegible］にまかせてきたという歴史性を持つ軍港である。

アジア人民を抑圧し、侵略し、反革命統合をはからんとする意図でもって利用され、今なお侵略反革命へ向けて日本海最大の拠点として再編されんとしている。米帝の「対日期待」は海上自衛隊であることに応えるべく日帝の海上自衛隊強化「四次防」を見るとき、はますます舞鶴軍港の再編強化が要求されているのであり、フリーダム・ボールト作戦に見られる共同軍事演習を軸にした日米韓台反革命同盟の再編強化の中で、そういった軍事の問題を「バラ色の未来都市建設」という幻想の中に押し込める事［illegible］図総合開発計画」の中で［illegible］、生活問題［illegible］想をふりまかんとしているのである。

我々は、能勢ミサイル基地建設阻止、新関西国際空港建設阻止斗争とともに断乎として斗い抜く決意を固めたのであった。当日は平和台奪還斗争と日時が重なり、叛軍の部隊を二分せざるを得なかったのではあるが、午後一時に同志社に結集し、学生部隊と若干の交流を行なった後バス二台に分乗して出発したのである。現地到着までの約二時間半バスの中で討論集会が開催された。関地区叛軍に結集する労働者部隊と、学生戦線との交流という形になり、京都隊攻防戦、大阪港湾浚渫化阻止共斗会議等々の斗いの報告と、今後舞鶴軍港解体斗争を斗い抜くという決意表明はバス内全員の拍手でもって確認され、一方、一貫して舞鶴斗争を斗ってきた京大C戦線の諸君のアピールは我々に更なる決意を固めさせるものとなったのであった。

やがて現地に到着した我々は、国鉄東舞鶴駅前で若干の集会を持ち、赤ヘル一五〇名の部隊は3つの戦列に分かれ海上自衛隊基地に向けてデモに出発した。多数の舞鶴市民の見守る中、肉弾戦を展開し、数名の負傷者にもかかわらず終始戦斗的にデモンストレーションを貫徹したのであった。国家権力機動隊は、市内ではいかにも交通事故のための規制をしているかのような態度をとりつつも一たん郊外に出るやいなや我々の暴行を加え、その本質を暴露したのであったが、我々の部隊は断乎としてその弾圧をはねのけ一名の逮捕者も出さなかったばかりか、市民に機動隊の反革命性をアピールし、拍手の中で総括集会をかちとったのである。

最後に、第4波、第5波の斗争を我々の指導の下、解体する日まで貫徹することを全員で確認し帰路に発った。

小西反軍裁判斗争に 第四回全国反軍決起す!!

第七回小西反軍裁判斗争五月十日午后一時新潟地裁で、全国から結集した反軍活動家、人民、知識人によって斗かわれた。その裁判斗争に先だち、五月九日、第四回全国反軍連絡会議が開催され、69年安保決戦の高揚の際、革命的左翼の武装進撃と革命の正規軍創出の激斗に答え、東北佐渡の地において、自衛隊内から革命的叛乱の火の手を上げた小西誠三曹より、(一)全国基地実態調査の報告と中間総括　(二)七二年沖縄自衛隊派兵阻止に向けての斗争指針、の二点［illegible］論争を進めつつ［illegible］した。

我々関西地区反軍［illegible］基地調査、宇治大久保基地調査、等に代表される到達意欲と献身的な活動の意義は、敵の武器を略奪し人民に補給する為にも、又、都市ゲリラ、武装蜂起を容易ならしめる為にでもあろう。具体的には、A反軍斗争に必要な基礎知識の習得　Bその知識を活用し反軍斗争のより強化推進する事　C自衛隊員と接触、結合しオルグする事　D地域人民との連帯を得、革命の兵站を作る事、等である。そして沖縄返還協定粉砕斗争から日米両帝の侵略反革命同盟の再編粉砕の斗いは沖縄百万人民と武装斗争で断固連帯し、網の目の如く網羅された軍事体系を粉砕してゆく斗いを反帝戦線と共に成す遠進する事を明示した。小西裁判を合憲、違憲論争の枠内にとどめ、スケジュール的政策阻止斗争へ押し込め60年代の遺産を喰いつぶす60年代合法カンパニア斗争集団―中核派、ハ派の非合法武装斗争からの逃走を我々は絶対解体し再編しなければならない。5/9.10の叛軍裁判斗争を現地で斗った京都隊叛民と共に、新西地区叛軍は今后、小西三曹の英雄的斗いを断固防衛すると同時に彼の斗いの意義を全社会、全隊内に波及させ、裁判斗争の過程で72年より実施される4次防、帝国主義軍隊の実態をバクロし、産軍学複合体制、軍需生産を大々的に究明、阻止斗争を貫徹していきたい。

すなわちそれであり「政治と生活」という問題設定自身が意味を持たず、この意味で「三里塚の農民は、明らかに生活するMの地平をはるかにのりこえている事をはっきり認識え、我々は現地と関地区叛軍の事務所を結び、現地の斗いを各地での斗いでもって再現すると共に重要な筈、能勢ミサイル基地設置阻止の斗いを、住民の名において情宣し 現斗の斗いを報告し、斗う仲間を我々の戦列に加えてゆこうではないか。 我々現地は「例え全住民が賛成派になろうとも絶対阻止する」決意を固めている。 防衛庁の宣工作が進んでいる現在、早急に各地での活動をすでに死にもの狂いで展開し、我々の戦列を更に強固にしてゆく必要があると考えます。

太事ム局アピール

70年度の「叛軍キャンペーン」の総括をその一点に整理し再び度提起したい。 能勢ミサイル基地の意図は、権力側の発表が公開されて以来2年を経過した現在徐々に明確化している。 日米共同声明以後、日帝の軍事同盟の再編、強化と同時進行的に極東軍事戦略の日帝の肩がわり政策が進行している。 その日、ついに日帝のアジア侵略作戦に見られる、日米両国の共同軍事作戦としてあり、その軍事戦略を軸にした日帝の再編を行わざるを得ないがゆえとして「新全国総合開発計画」「三次防約還」とする政策が打ち出された。 その新全総は日帝一国のイデオロギーと密着にさせる事により、より新たな矛盾を突し、人はミサイル基地設置の意図を新全総の一環である近畿総合開発計画の「バラ色の未来」幻想に組み込んでしまうのである。

アジア侵略再編に向けた基盤台で支配の徹底的政治宣伝を関西各地で、あるいは現地の世帯で貫徹し、その「叛軍キャンペーン」提起は、その政治宣伝を通じて、斗う労働者を我々の戦列に組み込むと同時に、'69、10／21以降のこの斗いの質を我々のものにすべく規律性・組織性を獲得する斗いとしてあったのである。 その成果は関地区叛軍の基础となり得るものを生み育てていたのであり、我々は絶対に継承する事として確認してきたと考える。 これが第一点である。

第二点は、我々の領域にある一つの住民の保障の問題である。 叛軍キャンペーンを契機にして現斗設置にする要なる民の深化をはかってゆかねばならない。 であるがゆえに、現斗設置は不断に問われている問題であったにもかかわらず、その民を保障できなかった点について我々自己批判的な総括を提出せねばならなかったのである。

我々は、関地区叛軍結成大会において、その自己批判的な総括を、われわれもとづくべく現斗団の派遣を提起したのである。

以上のように〝叛軍キャンペーン〟の総括を二つの観点からみなければならないにもかかわらず、住民と直接交わる者たちだった叛軍キャンペーンは失敗だったと代表される傾向には断固批判を加えねばならない。 その傾向は「叛軍キャンペーン」の斗いを一切清算してしまうばかりか、我々の政治的内容すらも住民の意識の由と混同させ結局は、政府—防衛庁との決定的斗いの局に斗いを組織できずにいる部分へと転落してゆく一歩手前である事を教えてくれねばならない。 防衛庁の動きがそくなに活発化してない現段階にあって、真に斗い抜く部隊を形成してゆく事が我々の早急な課題なのであって、それは決して、能勢町議会の反対決議表明を利用して住民を広範に結集させねば良いというものではないのである。 我々はすでに八百に近いミニニュースを配布した。 現在、七町内では、天王地区を始めとして各党派、団体がこ地区に分散し、85つの現斗を設置している。 だが我々の住民に対する宣伝はまだ総体的に不充分であり、防衛庁の現実作戦に対する展開は予想されてなければならない、我々は手に入るその情報を与えていた所では入手していない。 その現実段階における住民の意識が派への乗り移りは充分予想される事である。

我々は ① 住民の主体化状態を更に主体化させるべく住民と ② 各地区での民の吸収を させ、三里塚現斗団に参加させるべく斗い、 として展開し のせに更に10名派遣する事を提起したい。

第1部

第4月斗争の革命的意義

〈4/28清水谷集会〉

とりわけ4/28斗争は日本階級斗争の構造的転換を切り開いた斗いであった。社共集団・並マル集団、ななんずく67年10/8斗争以来の大衆実力斗争の地平を一切忘れ去り人民戦線左派へ転落した八派集団、という中にあって我々は、蜂起―臨時革命政府樹立の課題を提起し、八派の革命的再編を開始した斗として清水谷集団を貫徹したのであった。京浜安保共斗・赤軍派・我々という三派集団は実に一五〇〇名を結集した。

67年の斗争が反政府斗争の極に達した斗いであり、そのことは、革命的左翼が党としての限界の露呈、即ち、反政府斗争と心での斗いの能力は持ちえても、政府打倒へ向けた蜂起を組織する能力はもちえないということであり、党組織を改組し、イデオロギー的立脚点を確立し、世界党へきたえ上げてゆくことが現在的に問われているのである。三派の統一行動は、並装斗争を担える党へと改組し、そのことによる国際並装斗争を斗いぬくこと、そして反スターマルクス主義の止場の問題等々は、更に今位の党派斗争によって煮つめ上げられねばならないのであるけれども、非合法軍事組織である党の下に、自然発生的蜂起派大衆を体系化してゆかねばならないのであり、その様な党へと担互をきたえ上げていくものだ。

我々は、一五〇〇名の戦斗的労働者、学生を明確な「蜂起派」政治潮流として形成していかねばならない。八派の人民戦線左派への転落という中で、日本階級斗争の画期的地平を指し示し、歴史的事業に更に突き進んだ集会であった。

〈4/28斗争に至る斗い〉

3/21関西地区叛軍連絡会設立成集会以降、4/4能勢ミサイル基地設置阻止現地斗争を反切りに、「蜂起の輝型」村築の斗いを展開して来た。4/18蜂起派集会、4/23蜂起派統一行動を頂点とした4/28斗争に至る斗いは、並装斗争を維持、防衛、拡大すべく、その斗いの一大政治潮流へと形成していく斗いであったのである。人民戦線左派へ転落しつつある八派共斗を解体、再編し、二派を領導し、単一革命党建設に向けた斗いの物質化であったのであり、並装斗争をめぐる党派斗争を媒介に心つつ、諸組織、諸団体との共斗による大衆斗争を展開して来たのである。

我々は、その成果を清水谷三派集会へ結実させ、八派集会への革命的介入を貫徹せんとしたにもかかわらず、ソビエト主義、合法主義の頂点たる日向派の我々への敵対による敗北は、八派共斗の解体、再編の為の現在的壁を身をもって解明化せしめた。我々は、「蜂起の輝型」村築に向けた斗いの具体的任務を、ソビエト主義粉砕という形でしか提起することができず、日向派解体の政治的意志統一の不十分性に敗北の原因を求めねばならないのであって、その具体化こそ総括の軸となるであろう。

〈日向派の解体に向けて〉

まず我々は、12/18共共同中央政治集会に於て、同盟から追放され、イデオロギー的には、反スターマルクス主義政治的には、ソビエト主義、大衆運動主義であり、組織的には、合法主義であって、そのことは、69年秋の斗いの敗北の総括を何ら対象化したものではなく、果ては67年10/8以降の斗いを一切継承させるものではないことを、彼ら日向派に対する批判としてみきえてゆかねばならない。

三里塚農民、沖縄人民の実力斗争や、全世界に吹き荒れている並装斗争の台は、史進帝国主義心臓部における斗いで決定的に、何が立ち遅れているかを如実に示している。

我々は、本格的に侵略反革命軍事行動に乗り出した日米帝国主義と帝国主義列強に屈服した社会帝国主義潮流、そして混迷し、分解しつづける革命的諸潮流の中で、何よりも、反スターマルクス主義を止場しへ革命的マルクス＝レーニン主義を復権させ）、八派共斗＝ソビエト派解体、単一革命党建設、体系的非合法党建設の斗いこそ、世界プロレタリア独裁実現に向けた任務を持っているし、是非ともこの下道を歩んでいかなければならない。

再度、日向派の解体に向けての習慣を深めるならば、イデオロギー的な問題は、50年代前半以降、反スターリン主義運動を支配していたのは、反スターマルクス主義であって、それは社会主義革命への必然性から、革命運動を法則的認識運動へと歪曲し、実践的に客観主義＝生産力主義へと転落していったのに対し、人間主義的反撃から、経済学、哲学の学問的体系として形成された。それらは、いずれも、共産主義＝革命的実践であることは全く無縁であるばかりか、「法則の発見と利用」といった風に歪曲するのであり、共産主義とは、現実の変革運動であるという

〈次ページに続く〉

点を一切ほうむり去ってしまうのである。

政治闘争に関しては、現実的闘争の地平にあり、その地平を対象化してゆく作業を世界革命への飛躍の拠点として設定し、資本主義の原則的批判を基本として世界革命－世界赤軍の共産主義運動の階級的任務を明確にした我々に対し、世界革命－世界赤軍を観念の世界におとしこめ、実践的には叛軍行動主義の建設にのみ終止するという大衆運動主義に転落したのが日向一派なのである。

組織的問題に関しては、日向派は非合法闘争建設には反対であり、日共だけの軍事派である。ネニの10分を切り開くべく斗争を未だ組織しえないという現段階にあっては、党の武装として、即ち、60年型の合法的組織を非合法闘争に改組していく斗いを開始し、来たるべき全面非合法の時代に耐え得る組織の建設が早急な課題であり、大衆的組織とは別に建設されねばならない。それは当然にも人民を武装蜂起へ向けて政治的、軍事的、組織的に組織し得る革命党組織の建設である。現段階における武装斗争は、党の武装として非合法闘争建設の計画的な準備としてのみ遂行しうるのであって、解党主義－日向一派は、恒常的武装斗争の総括を何ら出し得ないままソビエト型組織建設との中に党を集約してしまうのである。従って尺、Gに敵対し、京浜安保共斗・赤軍派の斗いに「反革命テロリズム粉砕」を叫んで、かたすう大衆運動の組織化にのみほん走するのである。

我々は日向派の人民戦線左派への転落を我々の革命的戦闘でもって完全に粉砕し、革マル主義へと純化してゆく日向派を階級斗争ならびおむり去る事によって小ブル労働者への道を便に開いてやらねばならない。そこは彼等にとって安住の地なのであるなら。

〈次は何か〉

我々は、4.28斗争の総括を踏え、日向派の最後的解体を押し進めねばならない、党的内容においては、党の力敗、堕落した日向派が、日なを大衆運動において、大きな顔をしている事実を我物としていくべく斗いを我々はおそ〻に開始した。彼等の我々に対する唯一の批判－「三里塚斗争を斗っていない」という歪少な批判に対して我々は実践でもって返事をしてやる以外にすはない。三里塚農民と共に斗っている事実を聞いたら、彼等は何とするであろうか。その問題は二部で展開するとし、最後に大衆運動のみが日向派の扉であるけれども、首都に

（2）沖縄・三里塚斗争に決起せよ。

（72年沖縄返還をめぐる情勢）

72年沖縄返還を一大メルクマールとした日本帝国主義の侵略反革命軍事行動への本格的乗り出しは急速に進行している。それをめぐる情勢は、インドシナ大陸革命戦争の勝利的前進と、戦後ドル体制の国際的崩壊の中で、米中ソの新たな体制再編へ向け、米帝の強力な推進がなされている。米帝の国際的反革命戦略の破綻は、決定的にはベトナム戦争の不可避的拡大と、日帝の高度経済成長による資本の50年代、60年代を遥かに越える蓄積であり、それは当然にも国際反革命戦略の再編を日程にのぼらさざるを得ないものとしてあった。国際反革命同盟の再編強化として日韓共同声明以降、後進国革命戦争の圧殺のための肩代りとして日帝の浮上があるのである。フォーカスレチナ作戦、フリーダムボルト作戦という侵略反革命軍事演習は、空軍－米帝、海軍－日帝という関係において、米帝の極東軍事戦略の再編成つまるものである。しかしながら、国際米と中共軍事コミットメントの一層にみられる中国革命と後進国人民との結合は帝国主義者に恐怖の念をいだかせるに及び、中国を国連に参加させる事による帝国主義列強への巻き込みとして必死になろうとするを得ない。即ち、西独帝、日帝の経済戦争への動員論と中日との平和共存による妥協体制の構築としてある。

一方、「民族国家の武装自衛」として社会帝国主義の国際的結合は武装反革命潮流として形成されてきているそれは日米の軍配体制を維持するという政治的役割を果たしている事によって小ブル労働者への道を便に開いてやらねばならない。そこは彼等にとって安住の地なのである。

〈次は何か〉

我々は、4.28斗争の総括を踏え、日向派の最後的解体を押し進めねばならない、党的内容においては、国家主義をめぐる混乱として形成されてきている。帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命という二重の攻撃の中で、後進国革命戦争の拡大は、それといかに結合するのかという国際主義の問題として向われている。中山共産党はアイゼンハワー革命戦争断固支持の路線を打ちだし、国際主義の最低の責務を果たしている。帝国主義心臓部での国際主義の内実な蜂起－内戦の実現であり、国際反革命軍事大系に対する武装斗争の組織化と最低の任務とのつながりを断ち切り、国際的武装闘争との結合をかちとり、国際的武装闘

力の攻勢を保障しうる革命党＝世界革命の建設を我々のものとせねばならない。民族解放戦争は過渡期世界における国際主義的潮流であり、であるが故に世界変建設の現実的基かをなすものなのである。

ヘ5/19沖縄斗争の成果を打固めよ〉

以上の様な階級情勢の相違的把握をふまえ、5/19全国統一行動において我々赤ヘルメットは他党派を完全に凌ぎぬき、最も戦斗的に実力斗争を斗いぬいた。ヘ数十名にも及ぶ逮捕者の数は、その事を雄弁に物語っている。〉この斗いを再度捉え返してみなければならない。日本帝国主義の対外膨張は米帝国主義とのアジア軍事戦略上の位置を損わない仕方において進行している。沖縄返還を軸とした共同軍事行動は、日米織維支配に見られるように圧済的同化は今后の課題としつつ、国際反革命同盟の再編強化を通してのものであり「沖縄基地の縮少は作戦行動に実害なし」（米軍）「核秘密協定は存在した」（ニューヨークタイムス）、というように軍事面における協定は日米共同声明以来、緊密化の一途をたどっている。久米返還ー自衛隊沖縄派兵ーアジア派兵という和想の意図するものは、民族解放斗争に対する武力圧殺以外の何物でもない。ランパート海兵隊司令官の「沖縄は米オ三海兵師団の恒久的基地」「無限にその重要性を確保する」に代表されるように、侵略反革命戦争のための要石が沖縄として設定される。沖縄益々基地への六千万ドルの投入はがよりも侵略反革命の総基地としての確立強化を物語っている。この国際反革命軍事体系の再編強化は兵器の国産化、主要に海軍力の強化へ四次防〉から自衛隊員への反共思想教育、国内軍事網再編という「帝国主義軍隊ー基地ー軍需産業〉を軸に在郷軍人会、自衛隊父兄会の組織化として市民社会末端まで支配をはりめぐらさんとしている。とりわけ沖縄ー本土体化政策としてある返還策動過程は、徹底した反人民的抑圧と反革命イデオロギー攻勢として進行している。国政参加選等による沖縄人民の県民化として或会まで、排外主義へ包摂せんとし、階級・階層の分断・解体として進行している。ASサイン業者の反革命的組織化、全国労大量解雇、官公労のスト権ハク奪がその例である。新全総の沖縄ー見しへの適用を見逃すことなできないわけんである。

〈沖縄人民の斗い〉

復帰運動の形成基盤を若干かりけんって斗うならば、明治4当日沖縄併合を契機にして、一般・自治会をめぐる日帝の沖縄の地理的特殊性による軍事的価値を知って以来、差別と抑圧のくり返しであった。日帝の要民族支配の中で、国民友愛求連帯という国際志向は真ぐるみ復帰思想へとを展し、やがて復帰投路線の解体として表出する。

それは60年ユ4年重光ストの挫折、御ち薄波の裏切りー日米安保声明ー日政参加選挙という人民戦線派の帝国主義への包摂過程で、そのヘドモニーは解体され、コザ人民決起、日頃が、美里村民の実力斗争、伊高ゼネストとして展開された。三里塚農民と同様、そのいったん沖縄人民の戦斗的実力斗争を断固支持し、決して日際的孤立にしてはならない。戦斗的実力斗争との連帯を、我々はなによりに確認したように最低限の国際主義として、国際反革命軍事体系に対する実力斗争を貫徹しなければならないのである。今/19斗争の革命的意義は、まさにそのこととして真価が問われていたのである。組織的に収約するために（まさにそのことは、議会主義・反政力斗争の域を出ていないという裏返しとしてあるのだが）実力斗争をやらざるを得なな、た自ヘルの諸君に対し、国際主義で武装した我がヘルメット部隊のみが、諸派の日和見主義を乗り越えて、革命的に実力斗争を展開した事は、当然の事と言えばきったくその通りなのである。

我々はこの成果を更に、今/28沖縄斗争、三里塚6月斗争に結集させ、その事でもって蜂起ー内戦に向けた戦略的大事業を押し進めていわければならないのである。

スローガン

※ 帝国主義の侵略反革命軍事体系粉砕！社会帝国主義の武装反革命粉砕！

※ 帝国主義心臓部の蜂起＝内戦を実現する「蜂起の陣型」を打築せよ！

※ 八派共斗＝ソビエト派解体！単一革命党の下へ全ての武装斗争勢力を統合せよ！

※ 武装斗争を維持・防衛・拡大し、革命の正規軍を建設せよ！

※ 安保粉砕！侵略反革命軍事行動にのり出す日本帝国主義打仆！

・日米両帝国主義の侵略反革命前線基地＝沖縄を武装斗争の拠点に転化せよ！

・沖縄返還協定粉砕！自衛隊の沖縄派兵阻止！

・入管体制解体！先制的反革命を目指す差別支配粉砕！

・軍事基地解体！軍需産業粉砕！

・帝国主義軍隊解体！

・三里塚第二期強制代執行実力阻止！三里塚農民との戦斗的団結をみち取れ！

・小西叛軍裁判斗争勝利！隊内叛乱を拡大せよ！

・破防法裁判・R・G裁判斗争勝利！組織破防法攻撃粉砕

・能勢ミサイル基地設置阻止！新関西国際空港設置阻止

・舞鶴軍港解体！

・帝国主義労働運動の先に抗し、階級的労働運動を拡大せよ

・三里塚・能勢現斗団へのカンパ活動を展開せよ！

※ 5/28 沖縄斗争（PM6じ 扇町公園）に結集し、5/19実力斗争の成果を打ち固めよ！

第2部 I 新空港建設のねらい

'62年11月閣議（池田内閣）で第二国際空港建設の方針を決定、翌年運輸省は「ジャンボやSSTといった超大型航空機時代に入ると現代の羽田空港では手ぜまだ」という大義で候補地、規模についての立案を開始し、'66年6月には新空港公団法案が国会で成立する。新空港建設はそもそも米帝の侵略反革命戦争の拡大によって羽田空港における米軍機の発着数がふえたことから現実の日程にのぼる。その背景には第一に「国際航空網に占める日本の領域は3%弱でイタリア、西独にも至らずこのことが日本の信用にとって苦しい障害となっている。それゆえ今后の航空政策は超音速巨大旅客料（SST）時代にそなえること、特に'66年度にあっては東南アジア便が60便であったものを五ヶ年計画で160便に拡大すること、そして印度、アフリカ諸国への進出をとげ東南アジアにおける航空網の拡大を行い国際空港としての要衡としての地位をきずくこと」（運輸省'66年度「航空の長期計画」）と述べられている如く世界航空資本の独占市場になっている。日本の航空網の再編を行いその競争に打ち勝ちアジア市場進出の拠点を形成するということであり、さらにこの日帝ブルジョアジーの対外膨張は自衛隊の変質をもらさざるを得なかった。それは'63年2月1日から6月30日まで、防衛庁が秘密裡につくり上げた「昭和38年度総合防衛図上研究」（三矢作戦）に端的に表現される。第二次朝鮮戦争の勃発―非常事態法―自衛隊治安出動訓練―在日米軍の全体指揮下で自衛隊、朝鮮出兵―というこの作戦は二次防までの治安対策重視の守勢的戦略相想から攻撃的戦略相想への転換を意味し、新空港建設はこの自衛隊の朝鮮、アジア出兵の想定の上に立っていたのである。

65年以降 日帝ブルジョアジーは韓、台を軸としたアジアにおける独占的な経済的支配網を形成し この力を背景に 69年秋「日米共同声明」―72年沖縄返還（＝日米の侵略反革命前線基地への沖縄の再編）において韓国、台湾を運命共同体と言へ ベトナム―インドシナ民族解放斗争への反革命的介入を公然と宣言したのである。

日本帝国主ギは戦后20年の蓄積を背景に本格的な侵略―当然にもそれは反革命と結合して―を具体的日程におしあげたのである。まれに新空港は日帝のアジア侵略、反革命の発射台としてあることを 先ず押さえておかねばならない。

第二に太平洋ベルト地帯への工業労働力の密集―農村の荒廃と必ずいわゆる過密、過疎対策として「大都市に立地することが不適当な工業等の機能を徹底的に分散化」（新全国総合開発計画第一次試案）し「南北2千メートルにわたる日本列島が一体となって機能する」（69年新全総）ことをめざしたアジア侵略、反革命体制相策における69年「新全総」の先取り（首都圏整備）としてあった。このことを明らかにする前に日帝ブルの農業政策等を見ておく必要がある。60年代の日帝ブルジョアジーの農業政策の基本は、①国際食品資本に勝ち抜くための国内食品資本の育成を頂点にした農業の資本主ギ化 ②后進―国農産物の吸いあげによるアジア市場への進出があった。65年の「農業約締結を前后に財界から〝農民切り捨て〟〝開発輸入〟〝安あがり農政〟が強硬に主張されるわけだが しかし農村は従来の自民党の貴重な票田であり いわゆる農村議員（農村を基盤とする議員）との拮抗によってジグザグをたどるのだが 基本的には 自民党の基盤を都市へ移行させる（帝国主ギ労働Mを基盤とした一連の都市政策）ことによって69年で70年に至り ほぼその政策の全面を自己暴露するのである。69年米価据置し自主流通米制を背景とした食糧管理制度の解体、総合農政の転がん、そして70年の「農地法改正」をもって戦后農政の二本柱、雇用自作農、食糧制の解体―農業解体としてその全容が明らかになりたることによって全土を七ブロック化（北海道圏、東北圏、首都圏、中部圏、近畿圏、中四国圏、九州圏）それを七大中核都市（札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、博多）を設定しその中核都市を高速化された通信網、新交通体系で結ぼうとする新全総の中にはっきりと取り込まれていることが明らかとなる。

全国土の抜本的再編―アジア侵略、反革命体制相策の軸として 新空港建設の第二のネライがあるのである。

Ⅱ 新空港斗争史

〈66・6・28 三里塚反対同盟結成〜67秋〉

閣議決定（66・7・4）

――成田市議会の空港反対決議（同）を白紙へ（同年8・2）

――具体的な補償条件の発表、成田市への空港相談所設置等そこで空港建設が既定の事実として推められる。

翌年の夏までに

反対同盟の強い開拓部落（入植から二〇数年〝百姓として〟安定していない）の中に「十二分の補償が約束され、よりよい生活が保証されるなら、この土地にこだわらない」という、賛成派―条件賛成派（66・9・8成田空港対策部落協議会）

古村（古くからあった部落）の有力者を中心とした「始めは反対していたが情勢がかわった」という条件派（67・3・6成田空港対策地 者会）、これらの農民が敷地内の8割となる。

同盟の斗争は、在共に指導された陳情、抗議として展開された。

〈67・10・10外部測量抗打ち阻止斗争〜68秋〉

政府、公団は、敷地内の8割が条件派になった今、〝刀の誇示〟によって反対派農民の気勢をくじくことを狙い、機動隊二千名を動員。「土地を守るため」に座り込んだ農民の暴力的排除は、多くの農民を斗争から脱落させたが同時に、「最終的には力で押しつぶされること」「日共の敵前逃亡、支援態勢をとらない社党への失望」「土地を守るのは農民だ」という、自然発生的な反权力、斗わない社共への反撥の中で新たな斗争主体としての農民の位置が鮮明になってくる。

67・12月、同盟の「日共排除声明」から翌68年2・26、3・10、3・31の全学連、反戦による公団実力撤去斗争は、同盟の「農地収奪―人权無視」「世元民の意見無視―一方的強化」への抗議（66・6・28同盟結成大会宣言）による「無抵抗の抵抗」戦術から、反戦、反安保、反权力という政治の質と、大衆的実力斗争として定着していく。

それは第一に、6・30「成田空港粉砕全国総決起集会」には、反対同盟全員の〝武装〟へと拡大していったことであり、第二に「これまで農民の反対は、土地を取られるというエゴイ」から発していたが、今は違う、もっと大きな目的から理解されてきた。この気持は条件の引き上げや弾圧では、決して消せない」（6月、戸村委員長）というものである。

〈69・1月〜69・7〉

公団は、1月から代賛地（条件派の移転先）の造成、空港予定敷地へ通じる道路舗装を開始すると共に、深夜から明け方以外の時間には全く姿を見せず、裏での切り崩し策動（親戚、知人を通じての懐柔、恫喝、買収）に攻撃の軸を移す。内部への切り崩し、外側の工事の推進という政府、公団の巧みな攻撃は長期の斗争がもたらした生活破壊による先行不安と同時に、条件派の代賛地への移転、農家の転業が現実的に進行し、土地を媒介とした農村共同体が日々崩壊していく中での農民の動揺を正確に突いていく。これは明らかに同盟の〈土地への執着―权力への憎しみ〉による団結が、敵权力が目前にいなくなると〈現実の生活〉によって崩壊していくというこの質を鋭く向うものであった。

69年4月、青年行動隊は木ノ根に団結小屋を新設、以降、この小屋でこの向趾に真剣に取り込んでいく。それは、これまでの斗いの原点たる〝土地を守る〟というイデオロギーがいかなるものであるかを明らかにせずにおかない。

「土地所有とは国家权力から認められたものだっぺ。その国家权力を認めないなら、土地の私有とはどういうことになるんかなあ」「果たして農地死守だけで、みんなが幸福になれるか」という向趾の提起。ここには戦後政府权力の農政（零細自作農―食管制）が安手のブルジョアイデオロギーに支配された労働力の再生産構造としてあり、いまや都市プロレタリアート（とりわけ大手基幹プロの权力への屈服―同盟主義的労働運動）、帝国主義社民の支配の上に立って、その構造を解体せんとしていること。このブルジョアジーとプロレタリアートとという階級支配構造の中で〝農民〟〝農地〟、そしてその斗いを捉えようとするものであり、〈自己意識の解体〉（青年成線第二号8/8）という表現に集中される小ブルイデオロギーとの斗いが、青行隊を軸に、連日の学習会によって続けられていく。同時に公団の切り崩し策動に対する夜間パート体制の強化、「敵の攻撃を阻止する」斗いの止場、農民の斗うイデオロギー構築に向け少年行動隊の「同盟休校」戦術の提起として小ブルイデオロギーとの斗いを、全組織に普遍化させていく。

权力のいかなる弾圧、攻撃をもはねのけるイデオロギー、政治的質と組織的力量を形成しようとするこの斗いは、とりわけ、69・8・18斗争以降、単に青行隊にとどまらず、全同盟に向われたのである。

1/2 同盟と公団は「穴の中の農民を強行している間は公団は工事を中止する」という確約書を取りかわした。同盟はこれを「穴の自然崩壊や公団の強制排除など穴のなかの農民の生命に危険が生じた場合にかぎられる」として公団との対決たそなえ時間をかせぎつつ現在トリデ・バリケードの再構築・再補修をしている。

3/25 公団(千)三千六百、ガードマン三百二〇名を動員、地下壕撤去再開。支援部隊のいないスキをついて地下壕を撤去することによって農民の気勢をくじこうというネライの下で強行。

三里塚 六月米二期強制代執行へ。

III 三里塚斗争の日本階級斗争における位置

①「一実力斗争の意志を持たずおれたちの斗争を拡張や陳情にすりかえようとすることはまさに三里塚斗争をつぶすことである。おれたちがひるんでしまったことによって敵、国家権力がいかに大手をふって農地を、そして家までをブルーリンしたか」('69. 9. 28 青行隊)――「全農民の蜂起を」('70 戸村委員長)というこの実践を通した訴えは総合農政――新全総によって農地収奪攻撃を受けている全農民へ彼らが斗う和造を打築していること。

② 三里塚斗争が戦術的には蜂起を、政治方針から言えば政治問題を要求していること。これは'69年秋に革命的左翼が向われた問題に三里塚斗争はぶち当っているのであり、このことにどう答えるのかを抜いて三里塚農民との連帯がありえないことを三里塚斗争は突き出している。たとえば'69年秋の斗いを勝利として総括し、何が問題なのか一切分らない八派のキャンピオン・革共同中核派に「三里塚芝山農民のおそるべき死斗への突入にあたって、その農民としての戦斗力のかがりなき発揮に対してこれを大衆的に防衛しぬくことは革命的左翼総体の責務である」(前進別号)として自ら現実の斗いの右記であることを自己バク露している。又中核派を「農民の斗い――その防衛」を批判する日向一派も「三里塚斗争の戦略的領ドの内実もまったくこうした権力斗争を組織し準備する斗い――恒常的武装斗争の一層の強化――三里塚の斗いを基軸斗争として全力をあげて取り組んでいく事をはっきりと提起し、我々は日本農民とともに、そして、新しい権力と才非和解的斗いをそれぞれの場で闘いとろうと呼びかけている」(ニセセンキニチ八号)

同盟と公団は「穴の中の農民を強行している間は公団は工事を中止する」という確約書を取りかわした。同盟はこれを「穴の自然崩壊や公団の強制排除など穴のなかの農民の生命に危険が生じた場合にかぎられる」として公団との対決たそなえ時間をかせぎつつ現在トリデ・バリケードの再構築・再補修をしている。

3/25 公団(千)三千六百、ガードマン三百二〇名を動員、地下壕撤去再開。支援部隊のいないスキをついて地下壕を撤去することによって農民の気勢をくじこうというネライの下で強行。

三里塚 六月米二期強制代執行へ。

III 三里塚斗争の日本階級斗争における位置

①「一実力斗争の意志を持たずおれたちの斗争を拡張や陳情にすりかえようとすることはまさに三里塚斗争をつぶすことである。おれたちがひるんでしまったことによって敵、国家権力がいかに大手をふって農地を、そして家までをブルーリンしたか」('69. 9. 28 青行隊)――「全農民の蜂起を」('70 戸村委員長)というこの実践を通した訴えは総合農政――新全総によって農地収奪攻撃を受けている全農民へ彼らが斗う和造を打築していること。

② 三里塚斗争が戦術的には蜂起を、政治方針から言えば政治問題を要求していること。これは'69年秋に革命的左翼が向われた問題に三里塚斗争はぶち当っているのであり、このことにどう答えるのかを抜いて三里塚農民との連帯がありえないことを三里塚斗争は突き出している。たとえば'69年秋の斗いを勝利として総括し、何が問題なのか一切分らない八派のキャンピオン・革共同中核派に「三里塚芝山農民のおそるべき死斗への突入にあたって、その農民としての戦斗力のかがりなき発揮に対してこれを大衆的に防衛しぬくことは革命的左翼総体の責務である」(前進別号)として自ら現実の斗いの右記であることを自己バク露している。又中核派を「農民の斗い――その防衛」を批判する日向一派も「三里塚斗争の戦略的領ドの内実もまったくこうした権力斗争を組織し準備する斗い――恒常的武装斗争の一層の強化――三里塚の斗いを基軸斗争として全力をあげて取り組んでいく事をはっきりと提起し、我々は日本農民とともに、そして、新しい権力と才非和解的斗いをそれぞれの場で闘いとろうと呼びかけている」(ニセセンキニチ八号)

三里塚斗争が日本階級斗争の大きな位置にあることについて、おそらく革命的左翼の依拠――体系的非合法党建設を抜いては三里塚農民との真の連帯がありえないことを明確に把握できるだろう。我々のこの「蜂起の陣型」和築をめざした斗いは、'71、4、28斗争をエポックとして確実な傾向となりつつあるわけだが日向一派の我々への敵対そして人民戦線左派成りさがった八派による三里塚農民の支援包囲網は未だ小さく我々の力と現実の三里塚の斗いとの結合を阻害している。にもかかわらず我々が4、28首都において蜂起派として登場し「武装斗争の和造」を大衆に提起した成果を打固めるべく斗う農民、労働者・学生との結合を深めていかねばならない。「三里塚斗争が突きつけているもの」を徹底的に暴露宣伝し、4.28斗争の成果を打ち固めよ!! その地平を我物とし自らを革命戦士にきたえよ!! ただちに日本統一戦線体制を確立し、すべてのカンパを関地区被重現斗団へ集中せよ!! **風雪、三里塚の斗いを各地区で再現せよ!!**

だが一方、三里塚斗争に大きな質的転かんをもたらした。いわゆる新左翼は69年秋の安保政治決戦の敗北を総括しきれず70年にはいってはだれをうつことく何の為にを不問にしもっと多くの人民を組織するという美名のもとに人民から線左派へ反動的に転落する中で三里塚斗争の位置は大きく変わっていく。

私たち反対同盟は決意を固めた着工強行という権力の全面的な攻撃に対して真向から斗う組織と人をつくりだしていかなければならないと思います。」(三里塚から)

10、5強制測量を前にして(反対同盟)という呼びかけの下に「武装を何をつかってもよい。ただし自分の使う武器はかならず自分でもつ。使いなれない武器は絶対にもたないこと」を基本に同盟組織の武装拡大でもって9、30米三次強制測量阻止斗争が斗われた。(三里塚三日戦争)

土地収用法でもって農地収奪不可能と知った政府、公団は十一月五日、ついに三里塚を特別公共事業に認定し特措法強権発動にふみきったのである。同盟は特措法を迎えうつにあたって「全農民の蜂起」を訴え(戸村委員長)つつ権力に対する最前からの斗いとして土地を武装し命をかけた「地下壕づくり」の準備を進めてりく。

(1)2/22日以降の経過

2/22 千葉県、公団「代執行宣言」のみで退却。

23 第一号地点の公団買収地の植木数本を切り「強制代執行予定地内第一地点については完了した。」と宣言。なんとか実績をつくろうと四苦八苦。

24 少年行動隊、最前線に立ちガードマンと対峙、代執行を阻止。

25 「反対派の農民には稀有に暴力集団とは厳然たる態度で」(荒木口家公安委員長)、機動隊が前面に登場、〝凶器準備集合罪〟でもって支援部隊一四一名タイホ、文字通り農民と支援部隊との分断攻撃を加えてきた。

「彼らがどんな攻撃を加えてもへこたれない。ますます結束を固める」(戸村反対同盟委員長)という言葉通り公団ー千葉県を「代執行宣言」のみで撃退。

26 「過激学生たちが農業生徒を引込んでいるようだ。文部省は千葉県教委、現地の農業を通じて指導しており」(坂田文相)この指導を受け入れた現地小中学校長(6人が教育現場に)「先生、おれたちと一緒にトリデに残ってくれろ」と取りすがる少年行動隊員に説得のことばもなくて立ち去り体に気をつけて斗争しなさい」と言うしまつ。

27 千葉県、28中止宣言。千葉県政府協議に入る。

「空港建設は国家的要請である(佐藤首相)「代執行の基本方針を変える訳にはいかない」(佐藤首相、保利官房長官)という政府と「これほど反対がはげしいとは予想しなかった。これまでの方法ではできないと県知事に報告全力をあげて5月14日までの期限ですべての工事を完了する」(千葉県代執行責任者)という千葉県との協議の内容はもはや明らかであった。27、28両日とも3月一日にれた行政代執行攻撃が再開された。

3/2 千葉県警機動隊、管区神奈川・埼玉両管区計二千三百の機動隊護衛下で千葉県ー公団の代執行攻撃を再開。現地周辺をうめた四、五千の大衆が決起し執行粉砕に立ちはだかる。

(七)の「交通規制」という名目による大衆の排除、農民、労働者、学生の肉体的セン滅によってへ反対同盟発表によると百二名負傷)二号地点オートリデを県ー公団業者オートリデ丹打撃。

3/5 機動隊三千五百、きびしい検問体制で大衆を排除一斉検査(農民単名タイホされる)という支援の下で県ー公団ブルドーザー、ショベルカーなど大型土木機械をくり出し二、六号地点を制圧。

3/6 機動隊四千5、6両日あわせて逮捕者二百六十六名。(農民した肉体的センメツ、三、四、五号地点撤収される。同盟側調べ(シク現在)によると代執行期間中の負傷者、八百三十三名(内少年行動隊員十九名)で失明の恐れがある農民、流血の疑いがある学生がいるということである。すさまじい権力の強権ぶりを物語っている。

3/8 農民三千人(戸村委員長)の物量化された斗いが地下壕ある。機動隊による徹底弾圧下、強制代執行に終止符宣言で政府ー県ー公団の勝利をうたっても なお多くの斗争拠点は残っている。

さあるが故に これまで「今度の強制代執行は あくまで公団所有地内にある小屋の撤去、立木伐採が目的で 元農民は 対象にはならない」(今井空港部長)とつい先日まで 言い切ってきた言の根もかわかない内に 代執行終了の全勢をかって 地下壕を埋め 農民を排除するなどを開始した。

'70年2月～'70年秋

2・19 20強制立入測量

◎同盟支援の学生労働者と共に団結小屋にたてこもり調査班の立入り阻止

◎同盟休校

工事は大幅な遅れを見せながらも3月末には工事用資材運搬道路が完成し工事関係者の数も急増する。芝山町を中心として関連事業が至る所で行なわれはじめ、それと同時に反対同盟の各部落は自分の部落にかかる問題に対し独自の対応をしていく。

◎芝山中学PTA総会で婦人行動隊が防音校舎化反対提唱

◎部落内における道路測量実力阻止斗争(中郷部落)などこの頃工事は排水路工事と整地作業を続行しながらターミナルビルの基礎工事を開始していった。敷地内は一日一日と大きな変化を見せていくが2月5日の強制測量に対する全同盟員の実力斗争を基盤に固い意志統一が勝ちとられていく。「4年間の斗争は我々に法律とは何か、政治とは、議会とは何か、K案(核)とは誰の為の物が等々を自らが意図するにかかわらずきびしく向いつめてきた。そして法律とかK案とかを自由にあやつりながら我々を苦しめるその背景にある大きな权力という怪物といくたの斗いを通じ、[illegible]我々は[illegible]からはっきりと見ることができた。」(三里塚・芝山連合空港反対同盟・青年行動隊、要塞建設を阻む会"農地死守へエレを武器として权力と対決する"より)彼らは法律や議会が国家――暴力装置――をかくすイチジクの葉でしかないこと、これまでの歴史、農地はブルジョワ法で守られ国家暴力装置の庇護の下に、農民がそれに寄与することによって存在していたことを知った。それだからこそ当初から依拠してきた「農地死守」は階級的視点から捉え返されねばならない。つまり土地の収奪も权力の暴力装置の支配下にあるならば農地を死守すること、权力から奪還することは国家权力を打倒せずにあり得ないこと。我々の土地の代償は今や代替地でなく、政府、公団、(核)に代表される国家权力の生命なのだ。('70・1・30青年戦線別ワ)という言葉に端的に表現されるようにて「权力問題」に逢着する。強制収用をテテに取った权力の攻撃は農民の土地に対する視点の転換――小ブルイデオロギーへの克服として、より鮮明に「权力問題」を突き出したのである。農民の「土地」への視点の転換、二に立って「土地」を武器とした斗いの物質化として青年行動隊による木の根青行団結小屋地下に婦人行動隊、親同盟の全面的援助の下で地下要塞建設を開始する。(核)との力関係から「土地」を武器とした戦術は革命的である。)と同時に反対同盟管理の下で共同農業が行われる。これは全共斗Mの「帝大解体――バリ封鎖――自主管理」「学生存在の自己否定」ときわめて類似しているわけだが、では何故に全共斗の自己否定Mが観念の世界におちいり農民の小ブルイデとの斗いが現実のMの媒介となったのか。これは学生の生活と政治の二元論、農民の生活と政治の一体化としてよく指適され三里塚斗争の切拓いた地平として言われているわけだがこれはもう少し权力との関係で捉え返さないと三里塚農民が突破した壁が明らかにならない。先ず权力の支配构造の違いを見るならば労働者、学生は权力との間に仲別的本――労組、仲別大学――自治会、間接介在支配としてあったし農村においては部落共同体――封建遺制の利用の上に「零細自作農」政を基礎とした小ブルイデオロギーによる政府权力の直接支配としてあった。労働者学生の斗いが仲別斗争として、農民の斗いが反政府斗争として出発する基地がここにあったわけである。だがしかし逆に農村における支配构造はいはば权力が"生活保護"的に全生活者を支配してきたが故に权力Vの問題を不明にさせてきたし農民斗争の限界は常にここにあった。(たとえば激しい空港反対斗争と展開した富里農民は予定地が三里塚へ一転した時、さんで50俵もの西瓜を県知事に届けている。)三里塚芝山連合空港反対同盟・青年行動隊、要塞建設を阻む会"農地死守"の斗いは全学連、反戦の大衆的実力斗争と結合し权力との武装対峙を形成することによって国家权力と全面的に引き出していった。まさに全学連、反戦の果した役割はここにある。三里塚農民は自ら引き出した国家权力との関係において農民、農地を捉え返さざるを得なくなるのであり「農地死守」に依拠した団結が崩壊していく。(69年夏から'70年初頭にかけて同盟の突き当った力べである。)イデオロギーの克服抜きには一歩も斗いが前進しない――权力の弾圧、呪詛に負けていくという斗いの后退の過程で三里塚農民の「土地」に対する視点の転換がカク得されていくわけである。まさにこの過程こそ、農民が階級的立へ自らを止揚していくものであった。(生活と政治の一体化とは、この結果的表現である。)全共斗Mは大衆的実力斗争で权力を引き出しつつもブルイデの克服か权力の一対一的対応となり小ブルイデとの対決を組織の質へ定着しえなかったが故に自己否定が仲人の観念Mとして結果し内部崩壊の危機を拡大していったのである。

〈69.8.18御料牧場閉場阻止斗争〜70.1月〉

8.18斗争で新たしい団結の質の形成をめざした斗いを基盤に、青行隊は激しい実力斗争を展開する。

69年日米共同声明によってアジア侵略反革命の道を内外にむたって公然と宣言した政府权力は、「農政」の全面的な自己バクロ=農業解体をはっきり打ち出し、とりわけ、一番抵抗著の昭和46年4月のタイムリミットまで残る所一年半に迫られ、焦りの色が濃く、「国家的要請」という大義でもって再度三里塚空港の強行建設に踏み出す。8月18日の御料牧場閉場式とそれに続く工事開始宣伝、そして、それに並行した、反対同盟の組織センメツ攻撃である。

9月8日未明、权力は5百の共闘隊と現地に突入し、「御料牧場閉場式事件」の突破口として、青行隊7名、現同盟1名を逮捕、2名を全国指名手配する。農民の動揺は大きく、一時実力斗争を退避するかのごとき、この動揺をさらに深めるものとして、公団は、「土地収用法」の適用にふみきる(9.13)

「せんじつめて言えば、自分は自分で守らざるを得ないという所にたどりつくわけだよ。」——今同盟絶体としては動じて来たという事実を具体的に提えきれない、そんな中ではじめて、大きな弾圧として具体的に表われて、同盟の危机というような大きな问题として出てしまった。」(全国指名手配となった荻原青行隊長)ということである。これまでの斗いが权力の暴力VS大衆的実力斗争VSの対決であり、阶級斗争とは武装斗争であることを、この问题を通して、青行隊は確認していく。

「9.28三里塚国际空港粉砕全国総決起集会」において、「いまや、われわれは斗いの中で革命か反革命かを问われている」(荻原青行隊長)と突きつけ、「闭場玄粉砕斗争は全同盟の大衆的斗争」に至らなかったことを自己批判しつつ、「背水の陣へと居直った国家权力の新たな直接的弾圧の手はじめとしての逮捕に、我々は決してひるんではならない。そのために実力斗争を回避し路線を落としてしまうことは、まさに敵の攻撃に一歩も二歩も後退してしまうことに他ならない。我々は決して国家权力、警察の悧腕によって、斗争方針を決定してはならない。我々の斗争は我々自身が決起するのである。」(青行隊斗争宣言)と提起するのである。

69.12.16「事業認定」の許可がおりる。

70.1月中旬公団、1月15日以降に強制立入り測量を行うと発表。1月2日、天表闘争小屋にバリケード構築。

1月15日に、三里塚で「強制測量粉砕共斗集会」を開催したいという全国全共斗の申し入れを契机に、青行隊を中心とした同盟の「組织の質」を巡る論争が巻っまる。これは、69年暮に、第一期工事4千メートル滑走路の中心部、天浪で、部落は全て移転してしまい、その中で、大清水部落の岡野さんの出耕地の土地が反対同盟の土地であったが、岡野さんは、団結小屋の一角を残して、残りの畑を公団に売ってしまう。このことが70年1月にわかったということもあって、「权力側からの、いろんなつながりを断ち切っていけるような運動というか、組织というか、自分たちの力を持っていないと親戚等の関係で崩れる」(島君)という同盟組织へのきわめて強い危机意识が背景にあった。

「何か、連合反対同盟の基本的なその欠陥が未だに気づかれていないことに非常に问题があると思うんですね。で、今回収用法がでてきて、それに対して組织を上げて斗わなければならないと、つまり、これは基本的に一人一人がどういうふうに意志一致して、どういう团结でもって斗うかっていう大事な问题でしょう」(島青行隊員)

「これまでの農民は、革命的な存在だった。そして米騒動にしろ、内灘、砂川にしろつまるところ改良斗争であり、そのために体制側に根源的なところで打撃を与えられなかった。70年代の二里塚斗争は、農民が革命的存在になりえるのかどうかを追求する斗いでなくてはならない。」(青行隊長荻原君)

同盟、第一期工事地区の強制測量の対象とされる团结小屋、一坪用地の2〜3の要所を连び〝トリデ〟に送り、〝農地死守〟を貫徹する方針決定。

1月25日、500㊐面座り込みに突入

第3部　―関地区報告の斗いの報告―

Aはじめに

新関西国際空港建設の狙いは、第一に　日米帝国主義のアジア侵略反革命の一環として、東の二重隊と並んで、南に主力基地＝自衛隊の形成、強化を促進し、第二に国際金融資本の利益を最優先とした国際通信網、とりわけ新空港の整備、確立を基礎とすることである。ベトナム革命戦争の本格的拡大と沖縄新報斗争の激発は、日本帝国主義をして、アジア侵略反革命のためには、アジアの盟主として日米「韓」台反革命同盟の再編を押し進めること以外には道がなく、それは当然にも政治―軍事力の強化に専心せざるをえなくさせている。

このようなアジア侵略反革命に見合った「国土開発」として、69年5月「新全国総合開発計画」が打出された。これはつまり、国土のセメント化（北海道、東北、首都圏、中部、近畿、中国、九州）のもと、日本列島全体の管理中枢機能を首都に集中し、中央集権化をはかろうとするものである。このような中で、近畿圏の「開発」は明確に、東南アジアを射程としており、例えば神戸商工会議所会頭砂野某は「四国の徳島を含む大阪湾沿岸は馬蹄型の広域港湾として我国のみならず広くアジアの流通拠点となると豪語している。第二の狙いは、オリンピック、万国博、新東京空港建設に続く公共投資「国家的事業」として、日本帝国主義の経済的乗り切り策、侵略反革命のための経済的基盤確立としてあるのだ。第三の狙いは、このような「国家的大事業」に対する支持を国民に迫り、国益国防論、生産力思想への全人民統合のテコとしようとしていることである。つまり「公害をもたらすから反対」だとか、「軍事使用するから反対」だとかいった部分的な反対意志をも「ジャンボ空港を作らないと世界の田舎になる」という「日本の国益」を錦の御旗としたイデオロギーにより統合しようとしているのである。

A新関西国際空港建設阻止へ向けて

空港阻止斗争の方向はもはや明らかである。第一に帝国主義軍隊の形成、確立を要するアジア侵略反革命の発射台として、また経済的基盤確立として、空港建設阻止斗争を斗うこと、これである。それはまた、60年代の「大衆的実力斗争」と明確に区別された「帝国解体斗争の第二段階として「非合法党、正規軍建設と、それによる恒常的武装斗争―蜂起を実践的な射程とする」蜂起の陣型形成の一時代なのである。第二に、国益国防論、生産力思想への全人民統合に対して国家、国境の障壁を打破り全世界を単一の戦

年、結婚記念日、誕生日などの日にちのこと。日常生活の中で、日付を意識しなければならない場面は多い。

日付の書き方は、国によって異なる。

日本では、年・月・日の順に書くことが多いが、アメリカでは月・日・年の順、ヨーロッパの多くの国では日・月・年の順で書くことが一般的である。

また、日付を表す漢字にも注意が必要だ。

「一日」は「ついたち」と読むが、「二日」は「ふつか」、「三日」は「みっか」と読む。

「四日」は「よっか」、「五日」は「いつか」、「六日」は「むいか」、「七日」は「なのか」、「八日」は「ようか」、「九日」は「ここのか」、「十日」は「とおか」と読む。

「十四日」は「じゅうよっか」、「二十日」は「はつか」と読むことも覚えておこう。

「二十四日」は「にじゅうよっか」と読むのが一般的だが、「はたち」と読むこともある。

「二十日」と「二十四日」の読み方の違いは、成人式の日付を考えるときに重要になる。

日付の計算では、「今日から三日後」や「先週の金曜日」など、相対的な表現を使うことも多い。

「明日」は「今日」の翌日、「昨日」は「今日」の前日、「明後日」は「今日」の二日後、「一昨日」は「今日」の二日前である。

「来週」は「今週」の次の週、「先週」は「今週」の前の週を指す。

「来月」は「今月」の次の月、「先月」は「今月」の前の月である。

「来年」は「今年」の次の年、「去年」は「今年」の前の年である。

「一昨年」は「去年」の前の年、「再来年」は「来年」の次の年である。

「毎日」「毎週」「毎月」「毎年」は、繰り返しの周期を表す言葉である。

「毎朝」「毎晩」「毎夜」「毎夕」は、一日の中の特定の時間帯を表す。

「毎回」は、何かを行うたびに、という意味である。

「毎度」は、「毎回」とほぼ同じ意味だが、やや古風な響きがある。

「毎々」は、「毎度」と同じ意味で、手紙などで使われることが多い。

「毎日毎日」は、同じことが何日も続くことを強調する表現である。

「毎年毎年」は、同じことが何年も続くことを強調する表現である。

「毎週毎週」は、同じことが何週も続くことを強調する表現である。

「毎月毎月」は、同じことが何月も続くことを強調する表現である。

「毎朝毎朝」は、同じことが何朝も続くことを強調する表現である。

「毎晩毎晩」は、同じことが何晩も続くことを強調する表現である。

「毎夜毎夜」は、同じことが何夜も続くことを強調する表現である。

「毎夕毎夕」は、同じことが何夕も続くことを強調する表現である。

「毎回毎回」は、同じことが何回も続くことを強調する表現である。

「毎度毎度」は、同じことが何度も続くことを強調する表現である。

「毎々毎々」は、同じことが何々も続くことを強調する表現である。

「毎日毎日」と「毎年毎年」は、どちらも同じことが繰り返されることを強調する表現だが、「毎日毎日」は日常的な出来事に、「毎年毎年」は年中行事などに使われることが多い。

「毎日毎日」は、「毎日」を重ねることで、その日が特別な日ではなく、ごく普通の日であることを表す場合もある。

「毎年毎年」は、「毎年」を重ねることで、その行事が伝統的なものであることを表す場合もある。

「毎日毎日」は、「毎日」を重ねることで、その日が特別な日ではなく、ごく普通の日であることを表す場合もある。

「毎年毎年」は、「毎年」を重ねることで、その行事が伝統的なものであることを表す場合もある。

「毎日毎日」は、「毎日」を重ねることで、その日が特別な日ではなく、ごく普通の日であることを表す場合もある。

「毎年毎年」は、「毎年」を重ねることで、その行事が伝統的なものであることを表す場合もある。

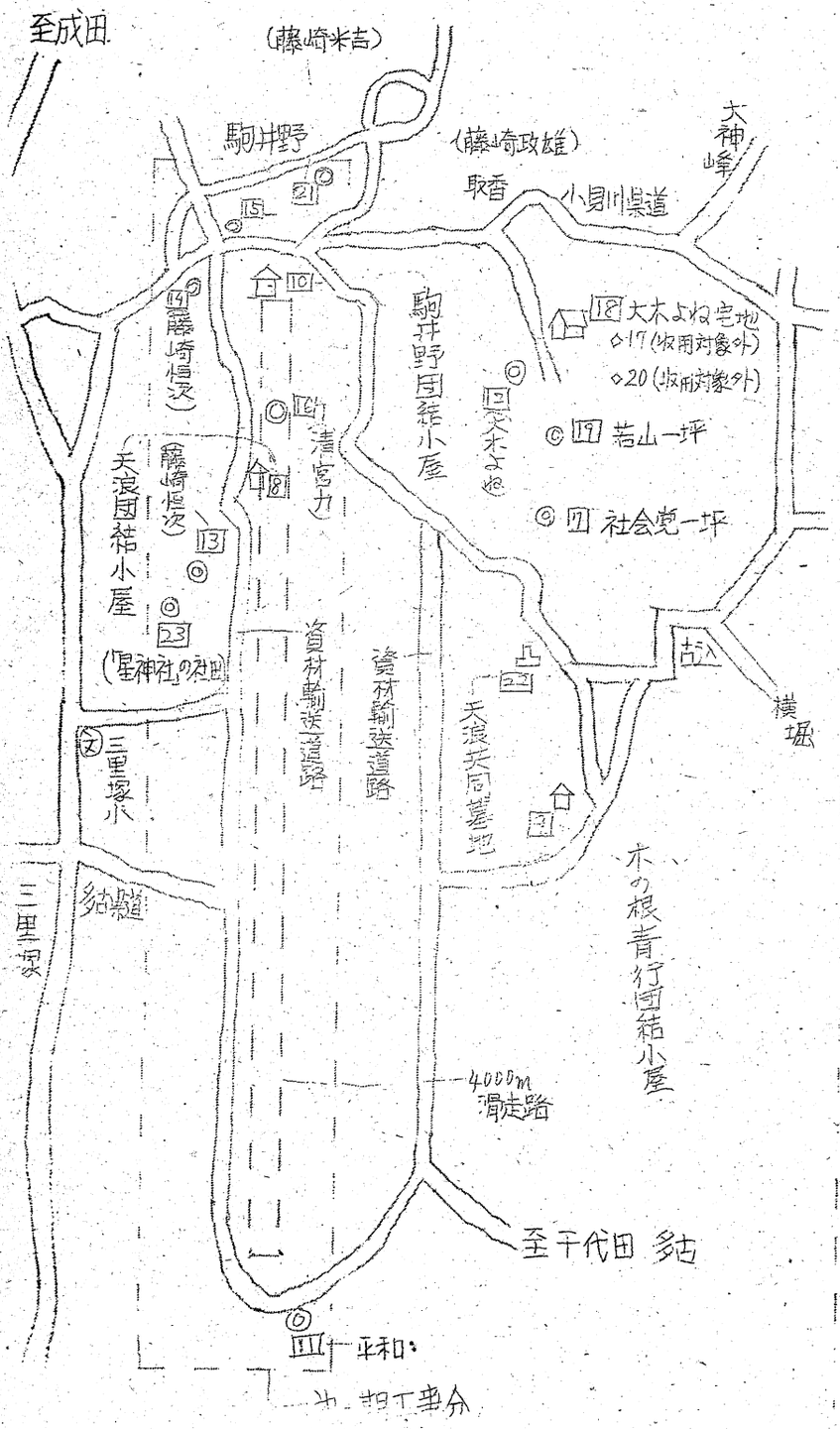
関地区叛軍三里塚現斗団アピール

全ての関地区叛軍に結集する兄弟達。

本日の集会に結集された、最も戦斗的な同志諸君。さる5、19の沖縄ゼネスト連帯斗争を、力カンに斗いぬき、八派共斗の人民戦線左派への陣落を、そして革共同中核派による八派共斗の右翼的固定化を粉砕し、蜂起の陣型へ解体再編しようとしている諸君に、関地区叛軍三里塚現斗団より、連帯のアピールと、現地斗争への決起を訴えます。北紛台地ー三里塚では、日帝ヌルジョアジーによる、全ゆる近代力の駆使による攻撃にもかかわらず、反対同盟に結集する農民を中心に、着実に、生産し、学習し、訓練するという、斗争の生活化が貫徹され、たとえ強制代執行が何次にわたって行なわれようとも、農民の土着性を解体し、農民を权力に屈服させることはできないでしょう。この農民の不屈の斗いに、恐怖し焦ソウする权力は今月の二日と十一日の二日間に亘ってガードマンによる夜襲を強行させ、3mの鉄パイプ、火災ビンによって、駒井野団結小屋、大清水団結小屋に対する攻撃を加けてきました。そして私服、公団等による交通網の検問体制も圧仆的に強化され、水も、もらさぬ警力イぶりです。当所、五月下旬から六月上旬に予定された第二次強制収用は成田市長選等の関係で七月に延期され、これに対し反対同盟は、青年行動隊と共に六月初旬に、沖縄ー安保斗争に呼応し、全国規模での大集会を打ち抜き、あの第一次代執行での权力、公団、ガードマンに対する軍事的敗北を、一方に於ては人民の武装斗争の転換ー岩、穴、人柱という防衛型斗争から、一挙に攻撃型先攻的武装斗争によって止揚し、又一方においては、全国の様々な人民、農民との連帯を、革命的蜂起と政府問題を軸にかち取ろうとしています。将に三里塚斗争のこの登りつめた地平は、67年10・8以降の我々の斗いと全くの同質性を有しており、蜂起と世界プロ独の問題に答えきらない限り勝利を語れない斗争としてあることを確認しなければならないと考えます。この三里塚斗争を初めとする日本所Q斗争総体が要求している。蜂起と世界プロ独を組織しぬく、責任をもって領ドする世界党としての蜂起の党の建設を我々が貫徹しぬかぬ限り三里塚斗争の、いやレーニンの第三インター以降の国際所Q斗争の前進は一歩もありえないし、三里塚農民との連帯は一切ありえないのです。今や、ヘル、災ビン、ゲバ棒をぶらさげて三里塚をうろつくのは時代遅れです。三里塚は蜂起の党によって武装した革命戦士を待っているのです。そして我々関地区叛軍現斗団は現斗本部を党の革命の学校として設置し、現実の所Q斗争＝革命的実践の中から数多くのプロレタリア兵士を排出していくでしょう。生産し、学習し、訓練する。この革命の学校に全ての関地区叛軍の兄弟達。全関西の最も戦斗的な同志諸君が結集されんことを要請します。そして、現斗本部設置に際しあらゆる物が不足しています。金、人、本、衣料、食料、乗り物、通信材あらゆるもののカンパを同時に要請し、来るべき第二次代執行、あらゆる反革命攻撃を粉砕し、日帝のアジアへの侵略反革命の発射台新東京国際空港建設阻止へむけ、その最前線で斗い抜くことを決意表明し、関地区叛軍三里塚現斗団よりのアピールを終ります。

第二次収用対象土地略図

15件 34筆 約3町6反3畝7歩
（反対同盟法対部）



われらいかに闘うべきか

戸村一作

―機動隊とガードマンの一体化―

特に代執行以后警察機動隊、私服、ガードマンなどの、一体化した暴力行為が現地に目立ってきた。五月二日深夜のガードマンの現地三つの団結小屋襲ゲキ事件などは その最もよい例である。それは、天浪を次に駒井野野戦病院をそして 大有水団結小屋を次々とおそい 火焔びんを投げ込み火災を起し 自動車二台を逃げるところをあわてふためいて 車を通路の側抗に転落させるというものである。全くこの襲撃は計画されたものであることはまちがいない。彼らは竹やり、とび口、鉄パイプ、火焔びんなどを用意し、寝こみをおそうという 最も悪質な手口である。だから同盟は四十二名という重傷者をだしたのである。私もその時 私の乗っていた自動車のうしろ窓から長さ二メートル余りの鉄パイプを取りこまれ 窓ガラスはメチャ〳〵に破かいされ 私自身も彼らの暴力行為をうけて負傷した。

この強悪な深夜の暴力集団をK察機動隊は 同盟員を逮捕することによって巧みにのがれたのである。そればかりではない。渡辺成田K察署長は「ガードマンが 鉄パイプ、トビ口を持つことは 何ら差しつかえない」という警察官としてあるまじき暴言を公然と吐いている。そしてK察、ガードマンの一体化した暴力行為の限りをつくしたのである。ある者は 彼らの打ちにす鉄パイプを腕でうけて骨折し あるいは 足の骨をおる、頭の裂傷という重傷を負ったのである。深夜の野戦病院は 負傷者の収容とその手当、治療の為ごったがえした。中でも 重傷者は成田の病院まで運ばれるという事件であった。

―マスコミまで 一体化する―

これに対して最近一ぎ月立ってきたものは マスコミのK察权力と一体化した報道である。「学生がガードマンをおそい火焔を投げた」といっせいに報道した。中でもNHKのニュースなどは最も悪質でK察のいう通りのことをいっている。これは代執行の時点でもその通りで K察機動隊、ガードマンの目に余る数々の殺人的暴力的行為は何一つ報道しなかったことを思えば当り前のことであるが いよいよマスコミが政府・权力側への御用機関化した事実は 今回のガードマン事件をかえりみても充分なづける。私達は マスコミに対する観点を改めなければならない。私が今まで全口をまわってみても マスコミからうける一般大衆の三里塚斗争に対する知識は はなはだわい曲されたものとして伝えられ その真相は知られていないのにおどろくばかりである。特にひどいことは 代執行におけるKサツ機動隊、ガードマンの一体化した暴力行為に対してマスコミは 申し合わせたかの如くいっせいに口をつぐみ これを報道しない。これは政府・口家权力の制圧がマスコミに加えられて その筆を折られたのか。それとも自ら权力に屈服したマスコミのなれの果てかそのどちらかであろう。所在 マスコミは人民大衆のものではなく 权力者の御用新聞であったという認識を今回の必悪なガードマン事件において 明確化することのできたことは幸いであった。マスコミに対する見解を新たにし これにきびしいけい戒を加えなければならない。

―いかに 闘うべきか―

さて私達はこれらの一体化した暴ぎゃく性に対していかに斗うべきかである。まず今后も必ずくるであろう暴力集団―ガードマンのしゅう撃に備えての攻ゲキ体制である。これは真剣に 考えなければならない生命の問題である。ところがK察はこのガードマンの暴力に対しては むしろこれを助長せしめる言動をとっていることは 現地にいる私にとっては明らかな事実として指摘できる。Kサツがガードマンを手先に使い 各団結小屋のしゅう撃をやらせて 農民と学生の分断を意図している。そして公団の土地収奪をKサツが応援しているのである。K察权力の何であるかは 三里塚斗争の中に完全にあばかれたのである。ついに 私達は私達の不屈の力によって自己自身の心身の防衛を斗いとらねばならない時点に到達した。私達は決意をここにもう一度新たにし 断固決戦体制の下により一層 心身の武装体制を強固にしなければならない。なぜなら 私達の生命を犯す暴力集団に対して 連帯責任の中で断固相互の心身を 保持すべきだからである。みすみす無ぼうな彼らの暴力によって尊い生命を失ってはならない。私は代執行の時ばかりでなく 無数のK察機動隊の学生、労働者、農民に加えてきた殺人的暴力を知っているからである。事実私はK察機動隊の暴力行為を身をもって体験した一人でもある。六月大決戦を目前に全口から結集する学生、労働者諸君同志は 心から彼らの暴力に備えて強固な準備体制を整えなければならない。口家权力の狂暴化する暴虐性に対決して 完璧な武装をもって準備されんことを切望して止まない。

〈関西地区叛軍連絡会議へのアピール〉

三里塚ノ分子細紙No.2

関西地区叛軍連絡会議

＜事務局アピール＞

三里塚斗争における資料は5月24日、我々の主催による「三里塚連帯集会」での資料がNo.1である。それはとりわけ66年6月「反対同盟」の結成から、三派全学連との結合、戦斗的実力斗争、69年8/18御料牧場団場阻止斗争、71年春末一次強制収用実力阻止斗争という一連の約6年にも及ぶ斗争の中で何を獲得し、今つきつっている壁は何であるのかを提起したと考える。即ち、反対同盟の「土地に対する視点の転換」は全人民的に权力問題をつきつけている。それは、我々革命的左翼が69年秋の斗争で逢着した問題であるということである。この点に於いて反対同盟と我々との共通認識―共通課題が設定されると確信する。

69年の徹底的な総括の上に立ってこそ、三里塚斗争を理解する事は出来ない事を知らねばならない。まさにそれが中核派、日向派を始めとする諸党派が、「農民の斗いの防位―その斗いの最先頭に立つ」ことを言いまわしは違えども、提起しえないゆえんである。諸派の雷雨を打った人民戦線左派への転落に抗し、「蜂起派」としての潮流を三里塚の地に形成することこそ、「三里塚農民戦争」と連帯し拡大核心であるだろう。

日向派は「内ゲバの止場」などと大真面にこそ「センキ」で発表し、自らの日和見主義を正当化しているのだが、我々現斗団員に対するテロ行為はその論理の破産を見事に証明している。つまりどうすることもできない死地に日向派は追いこまれていることの証左である。

我々の三里塚の地における斗いは、日向派に対する政治的勝利として着実に進行している。公式ルートを通した白杵地区への接農隊の派遣と、現斗本部の確立がそうである。白杵地区の反対同盟との連帯をゆっくりとではあれ、確実にならとりつつある我々は、来たるべく第二次強制収用実力阻止に向けた準備を急ピッチで進めているのだ。

今ここに資料No.2をお送りする。とりわけ7月29、30、31日の三里塚連帯シンポジューム集会に向けた資料として作成した。6・6集会での基調は、生々しい限りである。その北原事務局長の基調は今何をつきつけているのかを知る材料になるのではないかと思う。

第二部として、関地区叛軍現斗団からの通信を掲載した。5/24集会、6/14反帝戦線沖縄集会に向けたアピール文、及び、「戦線」紙上での報告と併わせて検討されたい。

＜一＞

―――― スローガン ――――

□ 第二次強制代執行実力阻止！
□ 新東京国際空港建設阻止！
□ 公団ガードマンの暴力テロを実力で排除せよ！
□ 農地奪還！
□ 三里塚農民戦争に連帯し「蜂起の陣型」を構築するぞ！
□ 蜂起の炎一里を建設し三里塚斗争に勝利するぞ！
□ 関地区叛軍三里塚現斗団に主心願せよ！
□ 三里塚農民戦争連帯集会をかちとれ！

7月29日　兵庫集会　6ぐ
30日　京都集会　6ぐ
31日　大阪集会　6ぐ　北市民会館

収用対象土地物件目録

反対同盟　法対部

	所在地番	現況(地目)	地積(現況)	所有者	関係人
7	駒井野字天狼 三三～二二九	山林(一坪)	約一反三畝	社会党56名	
8	天狼字大里 一五一～二	宅地(国結小屋)	約〇反四畝	岡野政美	岩間政男
9	木ノ根字横峰 九〇～二	宅地(木ノ根国結小屋)	約〇反二畝	菅沢俊夫	小川明治
10	駒井野字張ケ沢 一、六七～一	畑	約一反五畝	藤崎米吉	
	同 一、九二～一	宅地(駒井野国結小屋) 畑	約一反〇畝	藤崎米吉	戸村一作 菊地一茂
	東三里塚字吉野台 二一四～二	宅地 畑(平和塔)	約一反一畝	斉藤文男	佐藤弘
	同 二一四～五	宅地 畑(平和塔)	約〇反三畝	斉藤文男	佐藤弘
11	二一四～四	畑	約〇反八畝	麻生己一郎	
	同 二一四～三	宅地 畑(平和塔)	約〇反六畝	麻生己一郎	佐藤弘
	東三里塚字吉野台 二一四～一	畑	約一反一畝	内田ふみ	
	同 二一七～四	畑	約〇反二畝	内田ふみ	
12	駒井野字台の田 二、一〇五	田	約一反三畝	伊藤文亮	小泉よね
13	駒井野字横谷津 一、八三〇	田・原野	約〇反八畝	藤崎恒次	
	同 一、八三四	田	約〇反五畝	同	
14	駒井野字張ケ沢 一、〇七一	宅地・山林	約一反二畝	同	
	同 一、〇七二～一	畑	約一反四畝	同	
	同 一、〇七二～三	畑・宅地	約一反六畝	同	
	同 一、〇七三～一	畑	約〇反五畝	同	
	同 一、〇七三～二	畑	約二反〇畝	同	
	同 一、〇七四～一	畑	約一反〇畝	同	
	同 一、〇七六	畑	約二反七畝	同	
	同 一、〇七七	畑	約二反〇畝	同	
	駒井野字新堀 一、七四一～一	宅地・畑	約〇反八畝	同	建物所有者萩原義一は既に移転
	同 一、七四一～三	宅地	約〇反二畝	同	右に同じ
15	駒井野字日堀 一、二九九	山林	約〇反五畝	藤崎政雄	小川三男他四名

	所在地番	現況（地目）	地積（現況）	所有者	関係人
16	駒井野字広田 一、〇〇二～二	原野	約〇反二畝	清宮力 田嶌なお	田邊誠 他三名
	同 一、〇〇二～四	原野	約〇反〇畝三〇歩	同	同
	駒井野字張ケ沢 一、一三六～一	山林	約一反三畝	同	同
17	取香字新藤 一〇〇	山林（一坪）	約一反二畝	（小原子・辺田）32名	
18	取香字馬洗 七〇～二	宅地	約〇反七畝	岩沢真治	小泉よね 他六名
19	取香字天浪 八〇五	原野（一坪）	約〇反三畝	（台宿）33名	
20	取香字新藤 九七	田	約三反三畝	藤崎繁	石毛常吉
21	駒井野字日堀 一、二四四	田	約二反〇畝	藤崎米吉	
22	天浪字黄金台 一、八三二	墓地	約二反〇畝	三里塚第一開拓組合 大竹金三 小川明治 小川源 小川七郎 石井幸次	九三名
23	駒井野字横谷津 一、八三二	雑種地	約〇反七畝	木多正巳 他一五〇名	

○印は、調査期日が三月十七日、審理期日が三月二三日・二四日の分です。

◍印は、収用対象外です。

＜P7より続く＞

しかし、合計九回開かれた公開審理の場で同共反対派を除いて、実質審理は全くゼロ。反対同盟の抗議にもなんら明確な回答を示さなかった空港公団といい、変則審理のまま形式的な運営を押し通した収用委の姿勢は反対派とのミゾを一層深め、〃公団・収用委ぐるみ〃の不信感をかき立てたことは否定できない。

六六十地収奪阻止三里塚第二次強制代執行粉砕全国総決起集会への基調報告

集会に参加された全国の農民、労働者、学生、市民の皆さん、全県下、近隣市　村の皆さん！本集会は、第二次強制代執行を前にして、又駒井野一・二番地下壕、農民放送塔破壊を前にして、斗いに勝利するためにひらかれました。

裏政のもと、空港建設を強引におこなう政府ー空港公団に対して、反対同盟はもとより、全国、全県下、近隣の皆さんが、共通の課題として斗わなければならないと思います。13件33筆の「第二次強制代執行対象地」と空港公団の定めた、私達の土地は、4千米滑走路の中心をしめ、斗いの拠点として、空港建設を粉砕するため巨大な力を発揮してまいりました。それぞれの土地と皆は「空港建設絶対反対」の闘魂をこめた私達の斗いの証しであります。斗いの爆発を何よりも恐れる政　ー公団は第二次代執行を前に、斗争を圧殺するため、全ゆる陰謀を始めました。「空港完成時」が私達の斗いによって大きく遅れることを発表する一方それが私達の「理不尽」な要求によるものだとして、陰険な切り崩しを強行しております。親戚、知人を動員し、斗いを崩そうとする工作は日毎に強まり後をたちません。政府ー空港公団の宣伝に一役かうマスコミは「反対同盟大量脱落」なる事実無根のデマをデッチあげ、私達の内部に動揺をつくりだそうとしております。そして又、卑劣にも右翼ー暴力団をガードマンに　て、団結小屋に夜襲をかけるという殺人的行為も度合いを増しています。そればかりではありません。それを知っている警察権力は取り締るどころか、夜襲を防戦する私達に対して凶準なる罪名をつけ深夜のリンチをほしいままにしてまいりました。一例をあげれば、去る5月2日から3日未明にかけておこった9時間にわたる暴力ガードマンとの戦いにおいて、動員された国は、彼らに徹底的に加担し「家宅捜査」なる理由をつけて逮捕さえしたのであります。日銭二億円という尨大な国力を投入して強引に進めんとする空港建設はは、それに反対する私達に対しかく陰謀な暴力をもって弾圧を加えてきているのです。しかしこのような弾圧に対して、どうして私達が屈服するでありましょう。弾圧が強まれば強まるほど私達は断固として、不屈の斗いを組んでいかなくてはならないと考えます。

私達の斗いが、不当なゴネ得　として、暴力ガードマン機動隊、公団との「話し合い」があたかも正当なこととする言動は、私達に敗北と屈服を要求する支配者の行為として断固としてはねのけていかなければなりません。本集会は、このような斗争圧殺の渦巻く中にあって、今夏にもおこなわれる第二次強制代執行、および駒井野一、二番地実破壊に抗して同盟はもとより全県下、全国の斗う同志諸君と共に戦斗体制をきずくためにひらかれたものであります。空港建設に断固として反対し、代執行に対する実力斗争の準備こそ政府ー公団の全計画を粉砕する力であります。私達は第一次斗争以上の気迫と斗魂をこめ斗い抜くでありましょう。私達はみなさんに全力あげた決起を訴えるものであります。

動員された機動隊総数五万余、三里塚第一次代執行三十三日間の攻防戦は豪絶をきわめました。立木を無残に切り倒し、投入されたユンボ、ブルドーザーは人殺しの機械として登場し、地下壕に対して鉄の爪をふるいました。雨と泥の中、連日の激戦は駒井野の地を戦場と化し私達がうち倒さねばならない国家権力の姿をぎょう縮しておりました。私達はよく攻戦したと思うのであります。少年達はスクラムはもちろん、ガードマンのふり降す警棒の雨の中、公団庁舎に肉迫し、婦人達はおのが身を立木に鎖でしばりつけ老人達は余生のすべてをあの一戦にかけて斗い抜きました。駒井野に流された血は数知れず、負傷者は千数百名をこえ同盟はもとより支援の多くの住民、労働者、学生が傷ついていったのであります。逮捕者四六二名。その中にはいまだにつながれたままの者もおります。しかしみなさん。私達反対同盟員は第一次の斗争を誇りに思うのであります。ある意味で第一次斗争三十三日間の攻防戦は私達の勝利でありました。国論をわかせ、国家権力の無慈悲な姿をかくまで明らかにさせた農民の斗いは他になかったからであります。代執行期間二十一日の予定を三十三日間に延期させ、延数万にわたる周辺市町村の人々を決起させたのも第一次の斗争の生みだしたものであります。私達の斗争の正当性と気迫はゆうに国家権力をうわまわるゆとりがありました。むしろ斗いに恐怖し、身の安全を窮々としていたのは、国家権力、機動隊そのものであったのでしょう。私達は、装甲車のかげにかくれ、完全防備に身を固め、タテがなければ行動さえ出来ぬ彼等の中に敗北者の姿をはっきり見てとらないわけにはゆきません。そして私達の第一次斗争にお

才二次強制収用阻止を戦うための
闘争資金一千万円カンパを訴える
地下壕建設資金、放送塔および監視のための鉄塔・宿舎・団結小屋の増築・新築のための資金

三月五日、なあちゃんと弟と一緒に、とうちゃんの車で才二地区へ行った。家を出たのは朝の三時すぎだった。

少年行動隊のみんなとトリデの前でスクラムを組んでいたとき、村幼隊が急に襲いかかり、なぐるけるの乱暴をはいた。村幼隊は大人も子供もおうしゃしなかった。なぐられたり、けられたりしながら、村幼隊なんて気狂いの集団だと思った。

私は空港問題が起こるまでは、農業なんて、あまりカッコいい仕事だとは思ってもみなかった。それは間違いで、私たちは土なしには生きてはいけないんだと思い出したのは四年前、少年行動隊にはいってからだ。いまでもそう思い信じてきただ、村幼隊に乱暴されているうちに、こんな目に会うのなら、とうちゃんに話して土地を手放してもらい、どこか遠いところへ行きたい。

でも、とうちゃんなあちゃんが村幼隊に暴行され、血で顔を染めながら歯を食いしばっているのをみていると、一瞬、ひるんだ自分が恥ずかしくなる。私も両親のように命と乳換えにしても土地を守っていくんだ。いまはそういう誓っている。（秋原久子。14才、「三里塚岩の子供たち」・才三年目に入る）

駒井野才二地区の強制収去ならびに才二次強制収用対象の十六地区に私どもは今、地下壕を掘り、砦をきづき続けています。

監視塔や放送塔、それにたくさんの宿舎もいくつも必要です。全国の有志のみなさん。三里塚のふたたびの戦線の準備のために総額一千万円の斗争資金をつくるため協力してください。

三里塚・芝山連合空港反対同盟　財政・救対部

〈5〉

（前ページから）

けるスパイの激しさと又、斗いを通じて得た生きがいは昨年十二月六日、七日に開催した全国集会後二ヶ月にわたるしうちうな準備によって保障されてきたものでありました。残念にも私達の同志故小川明治副委員長は斗いなかばにし、二十三日急逝されました。故小川さんの「死してもなお斗わん」の不屈の斗魂は斗いにこめた私達の半生をも示しておりました。代執行強行に至る強固な地下壕づくりも、ヌバリケードの補強も、はたきた一切の話し合い、収用を拒絶して徹底抗戦を求めた私達の斗魂も死をあがなって勝利を願った故小川さんに表わされていたものであります。全国の同志のみなさん。近隣市町村のみなさん。才二次代執行に立ち向う私達の目標は「防御戦なら従農へ」に表わされた従農を実現することであります。今日、日本中が覚に表わされる話し合いや台頭は日本の暴政を許し、人民みな殺しを許容するものであっても、私達の生活と未来を明るくするものではありません。

（同志の）反対同盟のみなさん、全県下のみなさん、全国のみなさん。国家権力を人民の大海に没しさる大従農の実現に向って進撃しようではありませんか。強固な地下壕を作ろうではありませんか。

昭和四十六年六月六日

三里塚・芝山連合空港反対同盟
事務局長　北原鉱治

◎現闘報告 〈第一報〉

5月17日

―反対状勢―

第一次収用を終え ヌルジョアジー凹嶽权力のマスコミを
動員した農民斗争に対する必死の切りくずしになみわらず、
全反対同盟員の意気はきわめてケンコウである。たとえば戸
村一作氏の「農民はその土着性に依拠しつつ斗争の内なる自
己内在的な何なを発揚しごんごん強くたくましくなっていく」
という言葉や青年行動隊の「第一次強制収用
の⑭。ヌードマンに対する敗北を、あらゆる物をとり、
あらゆる方法で第二次、強制収用を阻止する」という決意の
中にもうなずけるであろう。

一方、空港公団は、第16地点凵②地点凵の「妨害物排除仮
処分」の申請を行ない第一回審理において反対同盟の戸村氏
は「非公開」に対し、口答弁記を要求。又同盟は公団に対し
「占有妨害禁止等仮処分命令」(土地、建物、塔、ざんごう
に立入ったり占有を妨害しない)を申請し次回審理は28日で
ある。又、反対同盟は反対同盟、青行隊の主催で沖縄斗争
安保斗争に連チイレ、全国キボの集会を6月の10日前後に行
い、一方における武装斗争のエスカレートと、他方全国の斗
う農民の糾合をめざす方針である。こちらのついて目を見は
るのは公団当局のあせりである。はや第一審の完ピリけ(6で
の進め方であり、三里塚一帯はダンプに砂煙公害にみまわれ
ているといっても過言ではないまい。5月2日夜～(5月3
日朝)と5月11日夜の駒井野団結小屋、大清水団結小屋他への
ナードマンのゲリラ攻撃は火エンビン、3mの鉄パイプで行
なわれ、小屋にいた中核は対応できなかった由。現地では⑭
私服による、検問タイ勢など一段と強化され、土取口には学生
服姿の右翼学生が公然と公団分室へつめかけている。

〈第二報〉

5月24日

―現地状勢―

第一報にも書いたように、空港公団の第16地点(農民放送
塔)の「妨害物排除仮処分」申請、反対同盟の「占有妨害禁止
等仮処分命令」の申請の次回審理28日の延期により早ければ
今月末～6月初旬に代執行があるもよう。全体的には第2
次代執行は9月～9月にもちこまれ、長期戦にもちこまれ
公団、反対同盟はこういう形で体セをこっています。公団は
強腰ですが、建設資が強腰で強制収用なら任意買収へもちこ
もうとしています。反対同盟幹部には社会党員が多いことな
ら社会党を媒介に同盟内の弱い部分天峰、木の根わ空港騒音
絶囲外区域なら行なおうとしています。同盟は、現在各団結
小屋、共同墓地の地下壕作りをやっており、この穴を軸に同

盟員のひきしめを行っています。(これまでは三里塚、芝
山地区の全反対同盟が斗争に参加していなかったし、空港
には反対だが斗争にかかっていなかた部分の同盟への結集
体制の強化)創えば千代田学区の部落集会では、「過去の
斗争への積極的参加のなかったことを総括し今後駒井野へ
千代田学区の穴掘担当地区)にかかわる」ということで
千代田学区の各部落なら毎日、穴掘り部隊を出し、防衛体
制の構築化を行っている。

〈第三報〉

5月24日夜、駒井野の婦内の労学連絡会議(NOV)の団
結小屋で沖縄の全逼と官公労の区域系の労働者2名と青年
行動隊と支援部隊の3者で沖縄―三里塚の現状報告と全
体討論を行ないました。

5・19斗争を斗った後の大衆状況は所の的視点
の多落と民族斗争の限界性があり、米帝基地沖縄―本土、
への志向→反米斗争という壁を出ておらず米帝なら日帝
への斗争の拡大できるかどう及疑問。

5、19ゼネストの宮公労の参敗は屋内の思想性のあらわれ
であり、沖縄政府内に本土員治信次郎務局長が策動にな
り住人弾圧を行ったこと。また春斗の失敗なスト決試の導
得をさまたげたなどに因がある。

"三里塚" 芝山町浅川の青行隊員 相川勝重君が死亡し
た。「第一次に穴が掘られ又掘っている。」これは一つの小さな
戦術であり、今後をどう守る及び向上。我々は第一次で
500名の逮捕者と1500名のけが人を出しながらもう
一度斗おうとしている。これは農民の根性であり土への執
着である。こんごはもっとすごいこと、第一次以上の戦術
で…… 斗わねばならない。岩山のコンクリの鉄
塔もその一つの戦術である。三里塚斗争の現局面では、敗
けている(第一次のここ)しかし、我々は来年4月を空港
建設は見込みない。これからの斗争 所の斗争としての農
民斗争を反帝斗争の面でやらなければならない。他の斗争
との連帯は三里塚斗争の推利を基礎として行なう。」

柳川氏(青行) 「これからの三里塚斗争の方向性はM
訴や政治一般では語れない。これまでの斗争は所の視点は
ほとんどなかった。これを自己への挑戦で斗争を担える態
度性を確立したい。」

島 寛征氏 「第一次収用後 支援団体は農民の代
理化している。現在 地下壕を掘ってるが穴掘りな支援団
体の政治的、組織的力量を反影しているのではないか。

政治（防衛及び攻撃的斗争の意味）ではもっと徹底した所での意志一致が必要。第一次強制は、責任の全面オルグや現地での徹底した討論などで充分な準備の上で貫徹したなあの程度だった。いもかかわらず第二次も戦術的に次が中心になろうとしている。」

以上が全体討論の内容であり、ここで僕が自然発生的に青行隊の諸君が達着している蜂起と政府樹立、60年代前Q斗争の総括をふまえて70年代日本前Q斗争の普偏的課題としての蜂起の党建設の問題を提起し参加者の大半の賛同を得なかっても、現実に斗われている三里塚斗争の今日明日の実践的方針樹立の欠除故にこの斗記を質導しえない限界性として討論自体が行きづまってしまったしだいです。

5・24討論の総括として……

島氏の発言の中にもあるように、大衆Mに党派の活動は党全体のりこえられ、集会の課題としての蜂起と臨革政府樹立の実践をどう体現するかが問われている。こういった意味で現在の支援団体の中には三里塚斗争のケン引軸となりうるものはみうけられない。三里塚はBUNDの登上をまっている。

以上。

⑩ 5・28 橋本里瑠相 来成弾斗第0。

PM2じ、成田市長选の自民候補 長谷川健太郎氏らんのため橋本が来成へ(田)。反対同盟は支援団体と共に京成成田駅前を反対同盟150、支援部隊100で占拠、橋本らの駅前でのアピールを阻止した。又、㊥500名、防共挺身隊等の右翼200名に防衛されて行なわれた。成田山基節堂前での街頭演説に弾圧介入、激しい糾弾を行った。橋本らはこの糾弾に恐怖し早々のていで長谷川の選挙事ム所へ逃げかえりこれに対し反対同盟は成田市役所で橋本、長谷川に抗討し、抗議状を手渡し、橋本らの握手を弾圧拒否し市役所を包場し市役所前での総括集会で戸村委員長、北原事ム局長が权力の平和安全を断固拒否、実力斗争で妥協的に斗いぬいたことを提起し全参加者は再度この提起を確認しこの日の斗争を終了した。

〈総括〉 橋本らはこの日も「羽田空港は、もうパンクしそうだ。国の発展のためには新しい空港が必要」と例の国益国防生産力史観で国民統合と安保建設を図ろうとした。これに対し反対同盟は内部的に所入している中核は空港ができると公害が起こると又、成田の住民を守ろうという所目的反発でしか対応していない。責行隊の中でも着実している所Q的視点の外部抽入が必要。

<17>

京都新聞(6/12夕刊)より

「これらのなかに社会党日公議員団らの一斑運動用地や団結小屋など、反対同盟系の十一件十二筆、一・一五haのほか、日共系反対派の「平和の塔」など一件六筆、0・四五ha、さらに両派と直接関係をもたない住人の住居など二件十二筆、一。四haが含まれ、土地所有者、関係者は合計三百八十五人となっている。

県収用委は、これらの審理に当たって、反対同盟、日共系、住人の三グループを分理し公開審理を開いた。三日二十日の日共系関係を皮切りに合計九回(反対同盟…日共系各四回、住人一回)の公開審理では、反対同盟側はボイコット"代執行をめぐる根源"シコー"など、正常な審理は一度も行なわれず、日共系も騒音対策や代替地問題などで公団側と激しく対立し、当事者間では、なんの歩み寄りもないまま、裁決に持ち込まれた。」

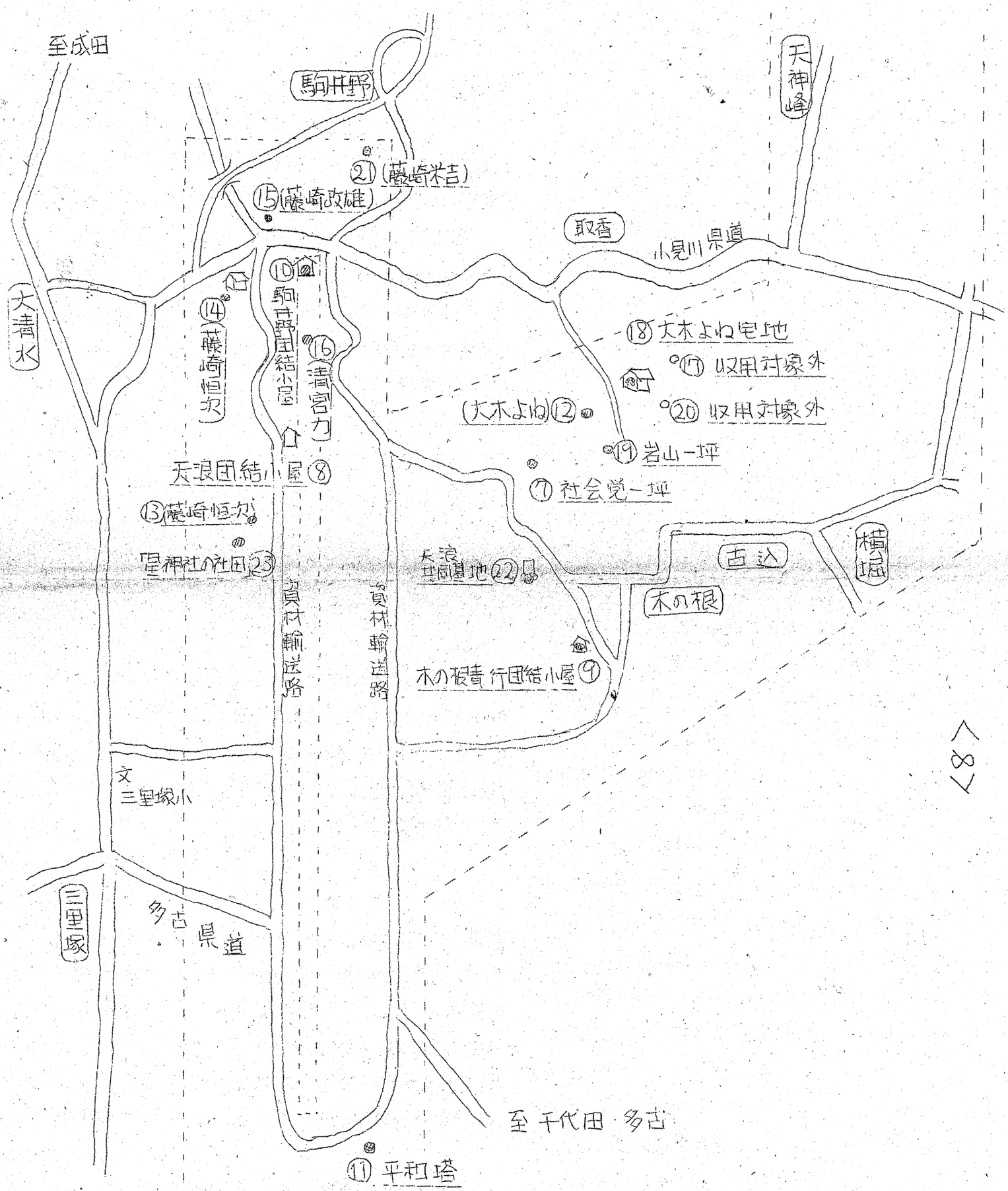
解説―「千葉県収用委が緊急裁決を出したことで、成田空港用地の反対派土地所有者はいよいよ最終的に明け渡しの期限を切られた。この期日を過ぎれば、また代執行の強行という事態は避けられない。

法的手順を追っていけば、まず八月十二日までに反対派は"立ちのき"を拒んだ場合、公団側は翌日、直ちに法務局で所有権の移転登記を済ませ、同時に県知事に代執行を要請。これを受けて知事が改めて一定期間を切って物件の取り除き、土地明け渡しを求めに「戒告通知」を出す。これで行かなければ、いよいよ代執行―という段取りになる。第一次ときは裁決の期限切れから代執行着手まで約三週間。だが今度は住居、墓地という特殊物件がある。

土地の強制収用では、これらは最も"難物"といわれる。その理由を見込んで代執行の第二弾は九日末から十日はごろ。四十七与当初の開港を"公約"している公団側にとってそれは、もはやぎりぎりのタイムリミットという。

今度の緊急裁決は「公共用地取得に関する特別措置法」にいわゆる"特措法"に基づき「特別公共事業」の認定を受けたうえで持ち出した"伝家の宝刀"。裁決申請を受けた県収用委は、原則として二ヶ月以内に裁決を出すことを求められていたが、結局、まる四ヶ月を費やした。二ヶ月を過ぎた段階で、公団としては建設大臣の「代行裁決」という強権発動を求める手段もあったが、あえて県収用委にケツを預けたのも、これ以上、反対派に刺激を与えることのマイナスを配慮したと見られる。

AP3AV

第二次収用対象土地略図

15件34筆　約3町6反3畝7歩　〔反対同盟 法対部〕